

# 北魏墓誌銘と造像題記の接点

東 賢 司

— 洛陽龍門第一四四三窟を利用して —

はじめに

古陽洞の名称で知られる河南省洛陽市龍門の一四四三窟には、多くの造像題記が残されており、『龍門石窟刻題記彙編』には、六八六の題記が集録されている<sup>(注一)</sup>。この題記中には、北魏の人名が刻されているものが多く見られるが、同時代資料の墓誌銘中に見られる人名と一致するものはほとんどなく、関連性は薄いように思われる<sup>(注二)</sup>。

その中でも墓誌銘にも造像題記にも共通して見られる人名がある。一人は鄭長猷である。造像題記として有名であるが、熙平元年に作製された羊祉墓誌銘にもこの名を見ることができ、この銘文中の婚姻の記録部分にその名があり、鄭一族と羊一族の繋がりを実証できる資料となる。

また、この他にも墓誌銘と造像題記に登場する人名が同一人物と思われる資料がある。墓誌銘、造像題記資料、『魏書』等の歴史書を使用して、系図を描いて見ると、各氏族の繋がりが見えてくる。

龍門造像題記についての研究は、古くは一九四一年に水野清一・長広敏雄が著した『龍門石窟の研究』があるが<sup>(注三)</sup>、近年では『龍門石窟碑刻題記彙編』の整理番号が使用される研究が多い。また、『古陽洞 龍門石窟第一四四三窟』<sup>(注四)</sup>には、題記の補足がある。劉景龍氏編纂の二書に記載される時代区分で資料を整理してみると、表一のようになる。

表一 時代ごとの造像題記の数量

北魏	東魏	西魏	北齊	唐	清	記述なし
一〇七	〇〇七	〇〇一	〇〇二	〇一五	〇〇五	六〇五

龍門石窟は、北魏に開鑿されたこともあって、時代的には北魏のものが最も多い。ただ、紀年なしが紀年のあるものの四倍以上もある。この中には、「楊大眼造像題記」「魏靈藏造像題記」等の北魏造像題記の品とされるものも含まれており、未紀年のものの年代推定をゆくと、北魏のものが圧倒的に多いことが予想される<sup>(注五)</sup>。

さて、龍門に作られた造像題記については、発願者等の人名が多数刻されている。これらの人物は、史書に掲載される者は少数であり、直接的にそれらの人物の情報を得ることは難しい。本論では、北魏墓誌銘に記載される人物と龍門古陽洞に残される人名との比較を行い、氏族間の繋がりを中心とした接点を探ることにしたい。

## 一 鄭長猷について

「前 太守」で始まる鄭長猷造像題記は、その紀年から景明二年（五一一年）九月三日に完成したことがわかる。全文は以下のとおりである。

前 太守、護軍長史、雲陽伯鄭長猷、為亡父敬造弥勒像一軀。一軀鄭長猷、為母皇甫敬造弥勒像一軀。一軀鄭長猷、為亡兄士龍敬造弥勒一軀。一軀鄭南陽妾陳玉女、為亡母徐敬造弥勒一軀。景明二年九月三日、誠訖。

この造像題記には、長猷の他に「亡父演、亡母皇甫敬、亡兄士龍、鄭南陽、陳玉女」の五名の人物が確認できる。造像題記からは、長猷が二軀の弥勒を、妾陳玉女が一軀の弥勒を作製したことがわかる。鄭南陽とは、次の『魏書』の記述から長猷本人であったと考えるのが妥当である。また、鄭長猷の母親は、安定皇甫氏である。

鄭長猷については、『魏書』劉芳伝に記載があることでも知られてい

る。この本文は、以下のようになる。

子長猷、以父勳起家、拜寧遠將軍、東平太守。尋轉沛郡。入為南主客郎中、太尉屬、襲爵雲陽伯。車駕南伐、既克宛城、拜長猷南陽太守。及鑾輿將反、詔長猷曰、「昔曹公克荊州、留滿寵於後。朕今委卿此郡、兼統戎馬、非直綏初附、以扞城相託。」特賜縑二百匹。高祖崩於南陽、斂於其郡。尋徵護軍長史。世宗初、壽春婦歎、兼給事黃門侍郎、持節宣慰。及任城王為揚州刺史、詔長猷為諮議參軍、帶安豐太守。轉徐州武昌王府長史、帶彭城內史。徵拜諫議大夫、轉司徒諮議、遷通直散騎常侍。永平五年卒。諡曰貞侯。

元休弟憑、字元祐。武定中、司徒從事中郎。造像題記が作製されたのは長猷の存命中であり（長猷が没した永平五年は、この造像題記が完成してから十一年後になる）、『魏書』の伝が記述されたのは、長猷の没後である。そのため、記述に差が現れている。造像題記には「護軍長史、雲陽伯」しか記述されていない爵位・官職であるが、史書からは多くの官職を歴任したことがわかる（粹内太守部分が官位・官職）。『魏書』により「東平」「南陽」「安豊」の各太守となつたことがわかり、先頭部分の空白にはこれの内のどれかが入ると思われる。また、長猷の子の廓が卒していることから、造像題記中の士龍のことではないかと思われる。

鄭長猷の歴任した官職のうち、注目しておきたいのは「南主客郎中」である。この官職に就く者の任務は、主として齊・梁などの南朝王朝から北魏を訪問した使節の接待関連の仕事である。北魏は南朝と激しく攻防を繰り返したが、一方では、互いに使節を送りあい、外交的友好関係を築こうとしていた。この使節に対応する官職は、一般的な総称としては「主客」と呼ばれるが、細かく分類すると、①尚書主客郎②南・北主客郎③兼主客郎の「主客郎」と、①南・北・左・右主客郎中②尚書主客郎中の「主客郎中」がある。北魏王朝でこの官職を得た人物を『魏書』や墓誌銘から抜き出して一覧にしてみると、以下の者を挙げることができる（出典に「伝」とあるのは『魏書』から抽出した）。

表二 主客一覽

姓名	籍貫	職務	時代	才学	内容	出典
李安世	趙郡	主客令 ↓主客 給事中	孝文帝	温敏敬慎、美容貌、善举止	接南齊 使劉鑣	李平 伝
張彝	清河	主客令 ↓行主 客曹	太和十五年	性公強、有風氣、歴覽經史		張彝 伝
崔休	清河	尚書主客郎	孝文帝	好學、涉歴書史、公事軍旅之隙、手不積卷	高祖納 休妹為 尚書主 客郎	崔休 伝
鄺道元	范陽	尚書主客郎	太和後期	好學、歴覽奇書、撰水經注四十卷等書		酷吏 伝
鄭長猷	滎陽	南主客郎中	孝文帝			劉芳 伝
李仁	趙郡	尚書主客郎	北魏末	少好春秋左氏伝而不存章句、尤愛馬班兩史、談論事意、略無所違。性嚴毅、簡淳言、工賞要、善尺牘		李靈 墓誌
李璧	勃海	尚書南主客郎	孝文帝			李璧 墓誌

これらの人物に共通するのは、学問を好み、博学であったことである。また、これらの人物が名門漢族であったことも注目し値する。当時の文化水準は、北魏は南朝の齊や梁よりも遅れており、積極的に南朝文化を取り入れようとしていた時期である。宗室の元氏が担当するのではなく、漢族が対応していたところに、北魏王朝の脆弱さを感じさせる。一方で、鄭氏との関係で考えると、清河崔氏や趙郡李氏との関連性を証明する資料となるが、このことは改めて述べることにしたい。



羊祉自身中央に進出していた官僚であった。

## 二 郭安興という人物

龍門一四四三窟と北魏墓誌銘に刻される人物をもう一例挙げてみる。『龍門石窟碑刻題記彙編』二五二三号の邑師僧智等題記である。日本では『書品』二〇九号に「北魏・僧智元乱等造像記」として特集があるが<sup>(注八)</sup>、龍門石窟内ではあまり注目されない造像題記であると思われる。この題記の原文は以下のとおりである。

邑師僧智元乱  
邑主鄭无意宋遷雄  
唯那李伯寿王欽郭副  
唯那秦悲龍郭珍奇周青  
唯那楊伏龍枉龍魯天洪朱欽  
唯那李安胡郭安興郭伯祖  
唯那郭万歳成徳宗王安興  
唯那薰香草武值生楊鐘葵  
唯那郭景備董樹生秦蛮爾  
郭惠郭真起蘇文洪朱天賜  
呂方鄭苟双秦双虎郭念郭口  
李双受魯虎明席双保田伯寿  
郭天愛侯青龍朱文樂  
郭伯宗蘇洪書鄭時張伏恩  
陳伏生孫鑒周韓九周張道安  
王苟郭豊国孟安王席苟王口

保

「とある人物であろう。当時の洛陽の様子を記載した『洛陽伽藍記』中には、「郭安興」という人名は見ることができないが、永寧寺は北魏の代表的な寺院であり<sup>(注十)</sup>、国家の意志で作製した建造物である。ここに永寧寺九層仏図についての記述がある。「中に九層浮図一所有り、架

銘文の人名の順番は、邑師、邑主、

唯那の順に記される<sup>(注九)</sup>。銘文中の人物の間にはどのような関係があったのかは分からないが、造像の作製に関わった集団であることには変わりがないであろう。この中では郭姓が多いことも確認できる(傍線部)。

銘文の解釈については、研究者によって多少の相違が見られる。邑師の「智元乱」は、『書品』で「智元乱」としている等、数カ所の相違がある<sup>(注十)</sup>。さて、注目したいのは、本文六行目の郭安興である。この郭安興は、『魏書』術芸伝に「世宗、肅宗の時、予州の人の柳儉、殿中將軍の関文備、郭安興並びに機巧たり。洛中に永寧寺九層仏図を製するとき、安興匠を為すなり。

木之を為し、挙高九十丈。」とあり、「浮図」と記載される。他には「浮図九級有り」「浮図に四面有り」「浮図を四角に向ず」という記載も見られ、永寧寺中の重要な構造物であることが想像できる。『魏書』には、安興は「匠」であると記載されることから、作製の中心的な人物であったのだろう。郭安興に関しては、従来の文献からはこれ以上の情報を確認することができなかったが、新出の墓誌資料によって、さらに情報を得ることができるようになった。

その墓誌は、二〇〇一年八月に洛陽市紗廠西路(隴海鉄道の南側)で出土した北魏のHMS55墓から陶器・陶俑など約四十件と共に出土した。一辺五十cmの大きさで、墓室入り口に置かれていた<sup>(注十二)</sup>。その墓誌銘の全文は以下のとおりである。

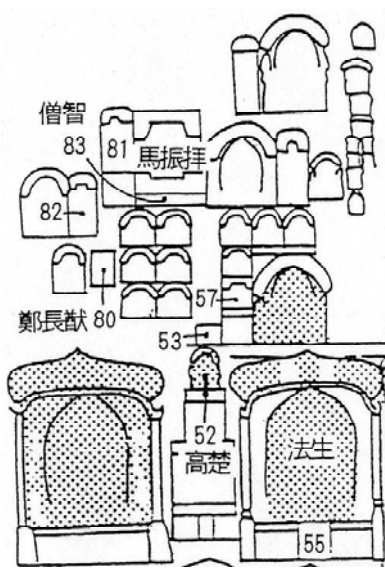
君諱定興、太原晋陽人也。氏索之由、以載史冊、三祖之分、具記家譜、故不復備詳焉。  
曾祖珍、南來客、聡睿識議、声和館邸。  
祖諱遠、鎮遠將軍、蘭台御史。  
父諱沙、庫部莫堤、濟陰太守、清明矛亮、世有嘉称。  
君諱興、始于事親、忠於事君、積階漸進、遂至今授。温良謹勅、徳順民心。正光三年四月末、遇患而卒。  
弟強弩將軍、永寧、景明都將、名安興、智出天然、妙感靈授、所為經建、世莫能伝。論功酬庸、以授方伯、已孔懷之、情深悲結。乃為以礼送終、墳塋旒「左ネ十右翌」、葬祭之儀、不奢不儉。略録三世、  
銘墓誌曰、(銘は省略)

この中で郭定興の弟とされるのが「郭安興」である。この銘文には郭安興が「強弩將軍、永寧都將、景明都將」であることがわかり、「智は天然より出で、妙に靈授を感じ、経建為る所、世に能く伝うる莫し。」とあり、『魏書』術芸伝に掲載されるほどの芸術的な才能を想像させる。また、安興は太原晋陽の出身であり、「珍―遠―沙」と続く家系であったことが確認できる。

## 三 造像題記の位置と作製年代

鄭長猷造像題記は、鄭長猷が発願して仏像を作製し、僧智元乱等造像題記は、智元乱が中心となり邑主らが仏像を作製した。一見、両者に共通性はないように思われるが、意外な接点がある。二つの造像は、一四四三窟の入り口上部にある。ここは南壁に分類されたり、窟頂部分に分類される位置である。鄭長猷造像題記の位置についてはよく知られるが、鄭長猷造像の真上に僧智元乱等の題記・仏龕が置かれるという位置関係はあまり知られていないように思われる。これらの上部に馬振押造像題記がある。この部分を写真等で確認すると、左右部ともに異質な層があり、左右の仏像龕との関係を遮断しているように見える。また、僧智元乱等造像題記の四六行目は、下の鄭長猷造像の光背と重なる程である<sup>(注十三)</sup>。両者には、関連性があるのであるか。

これに関しては、一四四三窟自体の開鑿の過程を把握しておく必要がある<sup>(注十四)</sup>。一般的には、造像題記の紀年によって順序をつける方法が妥当であろうが、この紀年の解釈については、温玉成氏が、古陽洞の魏碑には誤刻が多いことを指摘している等、簡単ではない<sup>(注十五)</sup>。この問題は、龍門石窟を研究対象とする諸家の重大関心事であるが、例えば、吉村伶氏は独自の見解を示している。氏はベンチ工法<sup>(注十六)</sup>を応用する限り、掘削の順序は上層の仏龕のほうが中層・下層よりも時期的に早い



図一 一四四三窟南壁左の仏像龕(石松日松子氏「龍門石窟古陽洞造像考」より)

こと、同じ層であれば、開口部に近い方が奥壁よりも時期的に早いことを主張している<sup>(注十七)</sup>。吉村氏の説では、南壁では、第三層入り口横の無名龕が太和末年(四九九年)、比丘法生龕が景明四年(五〇三)の作とし、無名龕と比丘法生龕に囲まれた高楚龕は太和二十二年(四九八年)の作としている。

この三龕のすぐ上にある鄭長猷龕がいつ頃作製されたかであるが、景明二年(五〇一年)の紀年があることから、一四四三窟の中では、比較的早期に作製されたと思われる。僧智元乱造像題記については、その更上にある馬振押造像題記の紀年が、景明四年(五〇三年)であることから、これらに近い年代に作製された可能性が高いと予想できる。

#### 四 鄭氏と郭氏のつながり

では、鄭長猷と僧智元乱等の二つの造像題記にはどのようなつながりがあったのであろうか。二つの造像題記を直接的に比較しても有効な手がかりを見つけることは難しいと考えられるために、墓誌銘や文献資料も加えて関係を見出したい。既に挙げたように、鄭長猷造像題記からは、鄭氏と関係がある氏族として、皇甫氏と陳氏が確認でき、僧智元乱等造像題記からは、鄭氏、宋氏、李氏、王氏等二十以上の氏族が確認できた。両者の造像題記の関係についてはであるが、鄭苟(あるいは鄭苟双)、鄭時という鄭姓の者がいることは確認できるが、この二名については、文献資料にも出土資料にも見ることはできない。

そのため、鄭長猷と郭安興の関係を広げ、滎陽鄭氏と太原郭氏の間を探ることにした。僧智元乱等造像題記の中で、最も多い姓が郭姓であることも一つの理由である<sup>(注十八)</sup>。墓誌銘資料には、当時の婚姻関係が記述されており、氏族間の関係を探るには有効な資料となる。氏族間のつながりがわかれば、造像題記が隣り合わせになっている理由を考える上での一つの参考とすることができよう。

#### (一) 滎陽鄭氏

前述の関連性も含めて滎陽鄭氏と他氏族の婚姻によるつながりを考えると、以下のようなものが挙げられる。

①	②	③	関係氏族	内容	根拠資料
安定皇甫氏	南陽陳氏	泰山羊氏	鄭長猷の母	鄭長猷の妾	鄭長猷造像題記
			羊祉の娘が鄭長猷の子の妻		鄭長猷造像題記
					羊祉墓誌銘

④	隴西李氏	伯欽の父の後夫人が榮陽鄭氏	李伯欽墓誌銘
⑤	博陵崔氏	崔賓媛の夫の父の妻	崔賓媛墓誌銘
⑥	范陽盧氏	盧令媛の弟逸の妻が榮陽鄭氏 盧令媛の弟摸の妻が榮陽鄭氏 盧令媛の長男弼の妻が榮陽鄭氏	盧令媛墓誌銘
⑦	勃海李氏	父楚の妻が榮陽鄭氏 娘孟猗の夫が榮陽鄭班豚	李璧墓誌銘
⑧	洛陽元氏	李媛華の父の夫人が榮陽鄭氏 姉長妃の夫が榮陽鄭氏 姉仲玉の夫が榮陽鄭洪建	武宣王妃李媛華墓誌銘
⑨	濟陰寧氏	寧懋の妻が榮陽鄭兒の女	寧懋墓誌銘
⑩	洛陽元氏	元誕の妻が鄭氏	元誕墓誌銘
⑪	洛陽元氏	元徽の妹が榮陽鄭氏の妻	元徽墓誌銘
⑫	河東裴氏	裴良の二男誕の妻は榮陽鄭氏 長女絳輝の夫は榮陽鄭氏	裴良墓誌銘
⑬	趙郡李氏	李憲五女稚媛は榮陽鄭道邕の妻	李憲墓誌銘
⑭	頓丘李氏	頓丘李氏の妻は榮陽鄭氏	李妻鄭氏墓誌銘

これらは、男性の榮陽鄭氏が他氏族の者と婚姻した例と、女性の榮陽鄭氏が他氏族に嫁いだ例を挙げている。既に挙げた資料中にもこのように繋がっていると考えられる。ただし、例えば女性の鄭氏がAという他氏族に嫁いだ先にBの氏族から嫁いだものがいた場合、鄭氏はBとも遠戚関係になるが、このような例は挙げなかった。これらを加えると、婚姻による関係は相当に広いものになる。

(二) 太原郭氏  
続いて、太原郭氏と婚姻等を通じて関係が確認できたものを表にしてみたい。

①	南朝温氏	夫人は太原郭氏	温嶠墓誌銘
	関係氏族	内容	根拠資料

②	太原王氏	王琚の妻は太原郭氏	王琚墓誌銘
③	趙郡李氏	郭頤の父萇命の妻が趙郡李氏	郭頤墓誌銘
④	河東裴氏	郭欽の妻は河東裴氏	郭欽墓誌銘

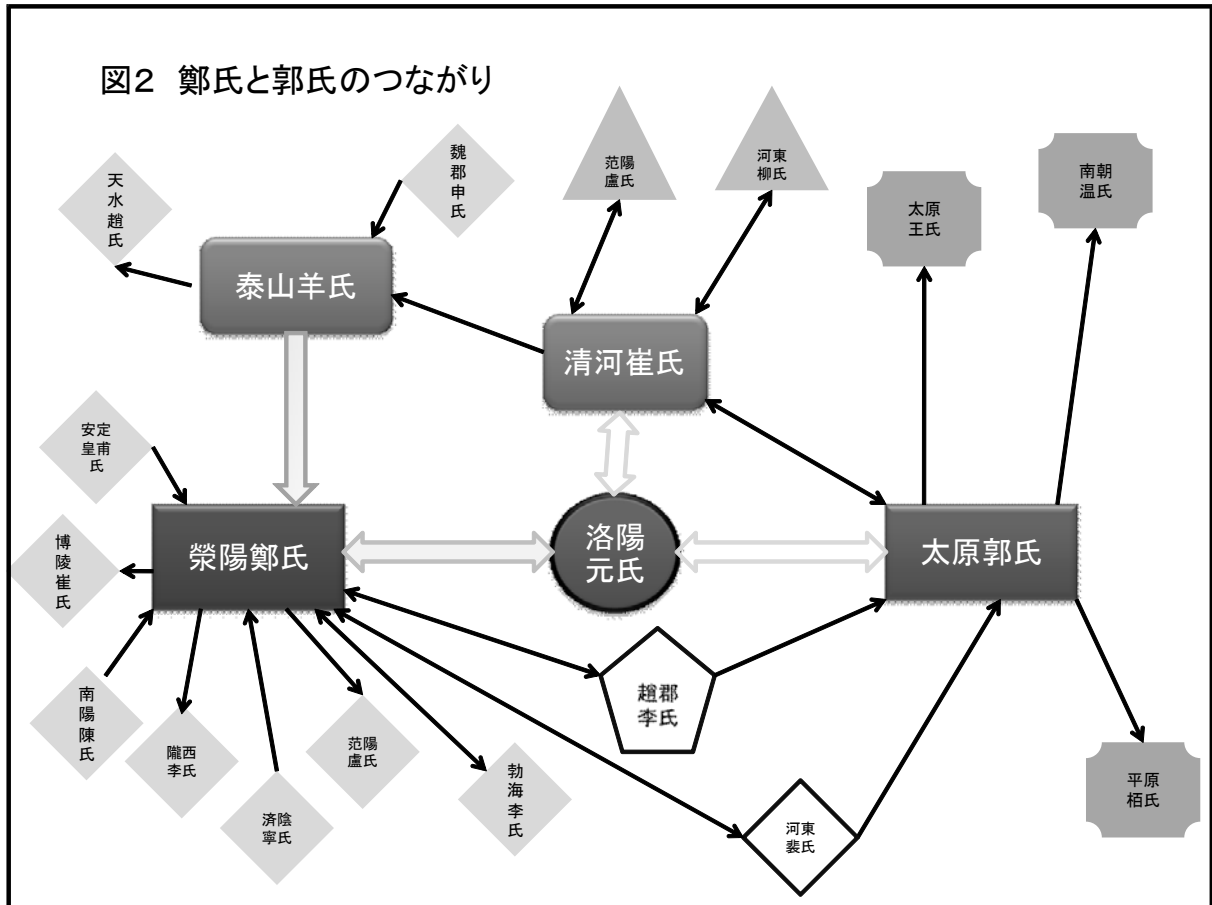
太原郭氏に関する墓誌銘は鄭氏よりも少なく、文献資料にも頼らざるを得ない。『魏書』崔浩伝には「真君十一年六月、浩を誅し、清河崔氏と遠近無し。范陽盧氏、太原郭氏、河東柳氏は皆浩の姻親、尽くその族を夷す」とある。洛陽遷都の四十年前の事件であるが、この後に郭氏は一族の復興をかけて活発に活動したと思われる。結果、『北史』宋弁伝に「侯文は郭祚を以て晋魏名門とし、容に従い弁に謂いて曰く、卿固より郭祚の門を推すべし、と。」とあり、郭祚の活躍によって一族の復活がなされたと考えられる。

### (三) 榮陽鄭氏と太原郭氏のつながり

前項目に挙げた榮陽鄭氏と太原郭氏を中心にした他氏族とのつながりをまとめたものが図二である。この二氏族が直接的に姻戚関係を結んだ事実は確認できなかったが、例えば趙郡李氏を通じて関係があったことは確認できた。また、羊祉墓誌銘から読み取ることができた清河崔氏との関係と『魏書』崔浩伝の太原郭氏と清河崔氏との関わりから、間接的には、「太原郭氏↑↓清河崔氏↑↓泰山羊氏↑↓榮陽鄭氏」というつながりが窺えそうである。さらには、表二の主客一覧で挙げた張彝と、太原郭氏の代表的人物である郭祚は同僚・友人関係にあり<sup>(註十九)</sup>、張彝が主客であったことから、同職についていたことがある鄭長猷とのつながりの可能性も見えてきた。榮陽鄭氏は、洛陽遷都後に実施された氏族詳定で四姓の一つであり、帝室と通婚を許された名門漢族である。一方の太原郭氏はそれにはいることができなかった地方漢族であり、一族の繁栄のためには、名門漢族との婚姻関係を結ぶことは絶対的な命題であった。孝文帝の洛陽遷都直後には、郭祚によって力を盛り返しつつあった郭氏のエピソードが『魏書』京兆王伝に残されている<sup>(註二十)</sup>。

高祖孝文帝が子の恂に司徒の馮誕の長女を娶らせようと考えたが、娘は幼く長く待つ必要があった。そこで、先に彭城の劉長文と榮陽

図2 鄭氏と郭氏のつながり



鄭懿の娘を左右の妾としようとしたが、まだ恂も十三・四の年齢であつた。孝文帝は天淵池に舟を浮かべ、郭祚・崔光・宋弁にそのことに意見を求めた。

このことは孝文帝が郭・崔らをいかに信頼していたかということの証明になる。また、鄭懿（鄭義の長子）の娘を皇帝の子の妻妾としようとしていたことは、鄭懿あるいは鄭懿への信頼にも繋がっていることが読み取れる。榮陽鄭氏と太原郭氏は文献の伝にも見ることができ、孝文帝の洛陽遷都後に開鑿が始まった龍門一四四三窟に、孝文帝との関係が深かつた榮陽鄭氏と太原郭氏がとなりあわせで仏龕を作った可能性も高いように思われる。

### 五 僧智元乱等造像題記の書風

僧智元乱等造像題記と北魏の墓誌銘には書的な共通性は見られるのか。ここでは字体の比較を中心に検討したい（注三）。

前述したとおり、僧智元乱造像題記は、石刻資料集に取り上げられることが少なかったために、書的な分析もあまり行われていない。唯一の資料としては『書品』二〇九号の伊藤伸氏の印象批評が挙げられる。「龍門初期、馬振拝造像記に似て、もうひといき荒けづりが小生初見の印象だった」と書かれるが、この直感に驚かされる。伊藤氏がこれを執筆した時期には、この造像題記が古陽洞のどこかにあるという情報しかなかったと思われるからである。

また、行が孤を描いていることについて、「刻面のゆがみのため」とし、「ドーム状の湾曲した部分に刻られた造像記は、これを拓本にとると、行が孤をえがくという理屈になる」としている。

しかし、これに関しては精査が必要である。確かに一四四三窟はドーム型ではあるが、大きくひずむ程の孤があることは考えにくい。写真資料として確認できる劉景龍『龍門二十品』（中教出版、一九九七年）や前出の『古陽洞 龍門石窟第一四四三窟』のこの図版を見ると、鄭長邑仏像龕の右にある異質層や、鄭長猷造像題記の左に伸びる異質層が四角の石面を確保させなかったのではないかと推測される。また、僧智元

乱等の仏像龕は、題記の真上にあるが、下半分の石質は異質層が複雑に入り組んでいて、細かい彫刻には適さないように見える。ただし、これは、実見によっても確認できず、実際に鑿を入れることができる層であるのかないのかを確認しないとわからない<sup>(注三)</sup>。

また伊藤氏は異体字についても触れている。この考察で、氏は孫秋生造像題記との共通性が高いとしている。注目しているのは「那」字であるが、六例を収集する『石刻録異字』で僧智元乱等造像題記と共通性があるのは、孫秋生・馬振拝・邑師惠感等しかないとしている。他の文字（歛・歳・雙・席）でも検証しているが、共通する資料は孫秋生・馬振拝が挙げられている<sup>(注三)</sup>。現在では、伊藤氏が『書品』二〇九号の文書を書いた年代（一九七〇年頃）にはなかった字書もできている。例えば、梅原清山『北魏楷書字典』（二玄社、二〇〇三年）では、「歛」「雙」「席」の文字は、墓誌銘の文字に共通性が高いものが多いことを確認することができる。造像題記には共通する文字が少なく、墓誌銘には共通する文字が多いという事実から考えると、僧智元乱等造像題記が刻された後に、徐々に作製されることになる墓誌銘にその字体が受け継がれたと推測することもできる。

表二 僧智元乱等造像題記と北魏墓誌銘の比較（左は墓誌の名称）

王僧男			那
太妃李氏			歛
王誦			雙
元詳			席
元珍			歲
丘哲			武

伊藤氏が取り上げた文字と字体が特徴的である「武」字について、造像題記と共通する字体を北魏墓誌銘から探してみた。右が造像題記、左が墓誌銘である。結果的には、ほぼ同じ字体のものを確認することができた。ただし、「武」字については、「止」の部分の画数が違っていて、

僧智元乱等造像題記の字体と同じものは、北魏墓誌銘中にも見ることができない。

また、造像題記の孤状の形についてであるが、墓誌銘にもこのようなものはある。河北省景県出土とされる李璧墓誌銘の側面には、李璧の祖先及び妻子についての記録がある。墓誌は石を整形をしているので、僧智元乱等造像題記のような条件下で作製されているのではない。それにもかかわらず、行の広がりが見える事は、何か理由があるのではないだろうか。李璧は勃海の出身である。また、この記録部分からは、父の楚の妻は滎陽鄭氏であり（字は潤英）、息女の孟猗は滎陽鄭班豚に嫁いで

表3 「孟」字比較

	僧智元乱 造像記
	李璧 墓誌銘

いる。勃海李氏と滎陽鄭氏のつながりを確認できるのであるが、そこに使われる文字、例えば、表三で示す「孟」字は、僧智元乱造像題記と同じ字体をしており、他の造像題記や墓誌銘にはあまり見られないものである。偶然が重なっただけかもしれないが、僧智元乱造像題記の特殊な文字使いは、山東からの影響という可能性も捨てきれない<sup>(注三四)(注三五)</sup>。

おわりに

皮錫瑞の『経学歴史』には「経学は漢に盛んなるも、漢亡んで経学衰う」とあり（経学中衰時代）、「経学は唐自り以て宋初に至るまで已だ陵夷衰微す」とある等（経学変古時代）、南北朝期の儒教衰退が甚だしいことを指摘している。儒教的な色彩の強い墓誌銘が南北朝の特に北魏王朝で多く作られていることは皮錫瑞の指摘と矛盾はするが、大きな流れとしては否定できないかもしれない。

一方、この時期には新しい思想・宗教も成長し、勢力を拡大してくる。仏教や道教がそれである。吉川忠夫氏は「儒教一尊の時代であった漢代とは異なり、六朝隋唐時代においては、儒教に対抗して仏教と道教とが盛行し、儒仏道三経が競い合う思想状況が顕在化した。そして仏教と道教はいままでもなく宗教であるから、六朝隋唐は宗教の時代としての性



格を際立たせましたのであった。」と指摘している<sup>(注二六)</sup>。北魏時代も吉川氏が記述する三経競合の時代にあり、特に、墓誌銘に登場する著名な氏族が龍門等の国家的な仏教事業に貢献していることは、これらの宗教が当時の人々に矛盾なく受け入れられていた証左となる<sup>(注二七)</sup>。

本論は、直接的な比較では接点がなかなか見られない墓誌銘と造像題記について、その関連をさぐるために、北魏墓誌銘と洛陽の龍門石窟の一四四三窟の造像題記を比較してきた。墓誌銘を利用することにより、祭陽鄭氏と太原郭氏の繋がりの可能性が見え、隣り合う造像龕が職業や民族的な結びつきによるものではないかという可能性を導き出したことは、墓誌銘と造像題記を関連づけて考察することにより、新しい歴史的事実が見いだせる手応えを感じさせた。

墓誌は儒教的な思想から作りだされたもの、造像は仏教的な信仰から作りだされたものであり、同時代の資料としての共通性はあるにしても、その接点を見出すことは困難と思われる。ただ、造像題記には、墓誌銘以上に人名等の記録が残されており、また、墓誌銘の出土地よりも広い範囲での出土例が見られることも確かである。数量も墓誌よりも多いであろう。残念なことに、これらの集大成をしている叢書はないために、このまとめの作業から進める必要がある。

今後は、石刻資料中の大きな柱である造像題記を整理し、墓誌銘などの他の石刻資料と比較して、より広くその接点をさぐることにしたい。

#### 〔注〕

- 1 劉景龍・李玉昆主編、中国大百科全書出版社、一九九八年。一四四三窟は下巻に収録。
- 2 よく知られるものとしては、元祐造像題記（熙平二年・五一七）と元祐墓誌銘（神龜二年・五一九）がある。
- 3 座右宝刊行会
- 4 劉景龍編、科学出版社、二〇〇一年
- 5 題記の時代推定については呉元真主編『北京図書館藏龍門石窟造像記拓本全編』一〜十巻、広西師範大学出版社、二〇〇〇年十二月が参考になる。

第二巻〜第四巻は無年月の北魏題記として分類・掲載している。

6 著者が目にした羊祉墓誌銘が収録されるものを年代順に並べると、①栄麗華、王世民『一九四九—一九八九 四十年出土墓志目録』（中華書局、一九九三年）、②頼非『齐鲁碑刻墓志研究』（齐鲁書社、二〇〇四年）③羅新・葉煒『新出魏晋南北朝墓志疏証』（中華書局、二〇〇五年）がある。この内、釈文があるのは③である。

7 銘文中に「三年（正始三年）、仮節龍驤將軍・督梁秦諸軍事・梁秦二州刺史・泰山の羊祉に詔して、旗を幡漾に建て、境を撫で辺を綏せしむ。」とある。

8 東洋書道協会、一九七〇年。この造像題記については、取り上げる資料が稀であるが、日本では数例の記事を見ることができ、発行年代の古い順番にあげると、藤原楚水『凶説書道史』二巻（省心書房、一九七一年）には、洛陽景龍門山魏造像五十品目録表中に鄭天意造像記として取り上げられる（四〇三頁）。また、中西慶爾『中国書道辞典』（木耳社、一九八一年）には、「鄭天意等造像記」として取り上げている（七三七頁）。この中では、「龍門初期の作と推定され、たくましい書で好ましい。」とあるが、『書品』の特集号からの引用かと思われる。日本だけにこの拓本資料が流れてきたようであるが、中央研究院傅斯年図書館にもこの拓本を所蔵している。おそらく中華民国時代が起源になっているであろう。関百益は一八八二年生まれで、河南省博物館館長等を歴任している。河南省の文物を積極的に発掘し、報告書を出している。龍門についても注目し、『伊闕石刻図録』（河南博物館出版、一九三五年）を著した。この中に「鄭天意等造像記」として記載されたことから、鄭天意等造像記という名称が使われるようになったと思われる。

9 邑師とは指導者のな僧、邑主は（邑子の）中心的人物であろう。また、唯那は「衆僧の雑事を司り、それを支援する人」とされる（中村元『新・佛教辞典 第三版』誠信書房、二〇〇六年）。この題記の場合、邑師は発願者であり、邑主・唯那は、組織内の役職や担当と思われる。注8の伊藤伸氏の解説には「集団の造像記の中でも、この造像記のように、邑師、邑主、唯那の三つがそろって出ているものはめずらしく、それも初期のものに多

いようだ。『龍門石窟の研究』石刻の録文一〇四七種を見ると、景明元年の呂師惠等□造像記を最古の例として、六例があるだけだが、うち菓方洞と蓮華洞にある二例を除いてあと　はすべて古陽洞にある。特に神龜二年に呂師惠等造像記は紀年の文字以外は呂師：、呂主：、唯那：と列名のみで、形からいえば、この造像記に　もつとも近い」として（四頁）、呂師惠等造像記との共通性を挙げ　ている。この造像題記を点検すると、人名として確認できるのが「惠感・孫念堂・吳士□・吳□・張□」が確認できるだけで、僧智元乱等造像題記との接点は見いだせない。

10 『書品』二〇九号には西川寧の臨書が残っている。呂主の鄭天意は「鄭无意」、唯那の杜龍は「枉龍」、唯那の武值生は「武僑生」、郭惠は『書品』に記載なし、郭□も『書品』に記載なし、任青龍は「侯青龍」である。また、最終行の「保」については、よくわからないが、前行末字の□が姓、名が保であるかもしれない。本文中に挙げた人名は、多くを『書品』の西川・伊藤説を取ったが、拓本資料から見ても妥当と判断したためである。また、人名が並列されているので、読点を打つことは難しいが、六行目は「唯那、李安胡・郭安興・郭伯祖」と読むことが妥当であると判断した。『洛陽伽藍記』卷一に記載があるように、孝明帝の五一六年（熙平元年）に、当時の実権者であった靈太后胡氏（宣武帝の妃）が、洛陽城内に建立した寺である。

12 郭定興墓誌銘については、『文物』二〇〇二年九期、『書法叢刊』二〇〇五年六期、『洛陽新獲墓誌統編』、『新出魏晉南北朝墓志疏証』に掲載される。ただし、龍門石窟一四四三窟との共通性は論じられていない。

13 本文末の「保」字についても、すぐ下に仏像龕あるいは題記が作られている、あるいは作られる予定であり、これ以上、下に下げられなかったのではないかと推測できる。

14 諸家が指摘していることであるが、宮大中氏も「古陽洞は天然の石灰岩洞、つまり、カルスト溶洞で鑿成された窟である」と指摘する。興味深いのは更に続けて「現在の本尊の釈迦牟尼仏座後部には数十メートルの洞穴がある。」としていることである（『龍門石窟芸術（増訂本）』人民美術出版社、

二〇〇二年、一六四頁）としていることである。北魏の開鑿が始まる以前にどのくらいの大ささの自然窟があったのかを指摘する研究は見かけないが、ある程度の大きさの窟があったために、最初の開鑿対象になったことは想像できる。

15 温玉成「龍門古陽洞研究」（河南省博物館『中原文物・魏晉南北朝仏教史及仏教芸術討論會論文選集』一九八五年特刊）

16 吉村怜『天人誕生図の研究 東アジア仏教美術史論集』東方書店、一九九九年に詳述されるが、土木技術的にはベンチカットと言われる岩盤掘削工法の一つである。階段状に上から下に掘削してゆくことが特徴で、これに従うと、上層から下層へと掘削してゆくことになる。

17 吉村怜「龍門古陽洞仏龕に見られる莊嚴意匠の意義」（毎日新聞社『佛教藝術』二五〇号、二〇〇年）十五頁参照。また、図一は、石松日松子氏「龍門石窟古陽堂造像考」（『佛教藝術』二四八号、毎日新聞社）の中にある「図六古陽洞内主要仏龕配置図」（十六・十七頁）の一部を利用した。

18 郭副・郭珍奇・郭安興・郭伯祖・郭万歳・郭景僑・郭□・郭真起・郭念・郭□・郭天愛・郭伯宗・郭豊国の十三名の姓名がある。

19 『魏書』張彝伝に「太極に初めて就き、彝と郭祚等、俱に勤の旧なるを以て微を被る」とある。

20 伝の全文は以下のとおり。初、高祖將為恂娶司徒馮誕長女、以女幼、待年長。先為娉彭城劉長文、榮陽鄭懿女為左右孺子、時恂年十三四。高祖泛舟天淵池、謂郭祚、崔光、宋弁曰、「人生須自放、不可終朝讀書。我欲使恂且出省經傳、食後還内、晡時復出、日夕而罷。卿等以為何如。」光曰、「孔子稱、『血氣未定、戒之在色』。傳曰、『晝以訪事、夜以安身』。太子以幼年涉學之日、不宜於正晝之時、捨書御内、又非所以安柔弱之體、固永年之命。」高祖以光言為然、乃不令恂晝入内。無子。

21 鄭長猷造像題記の書法研究に関しては、過去の研究で出尽くしている感があるため、改めての検討は行わない。ただ、近年の研究として注目しておく必要があるものに、華人徳氏の「分析《鄭長猷造像記》的刊刻以及北魏龍門造像記的先書後刻問題」がある（『六朝書法』上海書画出版社、二〇〇三年、八七〜一〇〇頁）。この中で、鄭長猷造像記は「不写而鑿」、つま

り「朱丹をしないで刻工が直接文字を刻した」という指摘をしている（八九、九三頁等）。さらに、古陽洞の頂部には賀蘭汗・馬振拜造像記などの稚拙・自由・無束のものがあるが、書丹から刊刻という作業にならなかったのではないかとこの指摘もされている（九三、九四頁）。また、陸明君『魏晋南北朝碑別字研究』（文化芸術出版社、二〇〇九年）は華氏の研究を受け継ぎ、「鄭長猷造像記や北魏景明年間から正光年間に作られた造像記（具体名称は省略する）は、任性鑿刻であり、錯字、漏字、俗別字の現象は、碑誌とはなはだ遠く、文人士大夫の筆下ではないであろう」と指摘している（三四、三五頁）。

22 『龍門二十品』の二四、二五、一二四、一二五頁、『古陽洞 龍門石窟第一四四三窟』第一冊の一九〇、一九一、一九二、一九五頁の写真を参考にした。

23 『書品』二〇九号、三頁を参考にした。また一四四三窟の初期に作られた造像題記の共通性について、黄惇氏は「龍門二十品中で元詳・孫秋生・解伯達は伸びやかで柔和な特徴があり、南風の影響がある。鄭長猷・比丘惠感・賀蘭汗は刀法が同じであり、類次の刀法をしている。他に、楊大眼と元詳は同じ刀法をしている。」としている（『秦漢魏晋南北朝書法史』三四三頁、江蘇美術出版社、二〇〇九年）。刀法においても、一四四三窟の入り口付近にある早期に作られた造像題記に共通性が見られるという指摘には注目しておく必要がある。

24 本論文は、平成二十三年十月二日に開かれた、全国大学書道学会旭川大会中の発表「北魏墓誌と造像記の接点」を元にまとめ直したものである。発表中に、新潟大学の鶴田一雄先生から「龍門造像記の書については『書品』中に宇野雪村氏らの考察があるので参考にするとよい」というアドバイスを頂いた。まずは感謝を申し上げたい。書品の龍門造像記の特集は十七号（龍門二十品1）、十九号（龍門二十品2）、三四号（龍門古陽洞小品）、二一六号（龍門造像記小品上）、二一七号（龍門造像記小品下）がある。書風の批評として注目しておきたいのは、この内の第一九号（一九五一年）所収の西川寧「龍門雜記」には「始平公・楊大眼・孫秋生・高樹解伯都・牛徽などは方筆の特色を發揮しながら最も整ったものである。特に始めの

二つなどは原本が想像出来るやうな所がある。よく俗に大聖武といはれる写経（賢愚經）を始平公に比較する人があるがいかにも似た所がある。北魏經では正始二年の大般涅槃第四十などがもとの姿をしのばせる所がある。スタイン本中の正始元年の勝鬘義記などもよい例である。」「鄭長猷は恐ろしくぶきようなものだが、先述の西北様式の旧派だらう。」（いずれも五五頁）とある。造像題記のルーツについては、南朝・北涼・山東など可能性が多く考えられるが、現在のところ、核になる考えはできていない。今後の課題としたい。

25 北魏の文字資料として重要なものには、写経がある。刻石と写経の作られ方は異なるので参考ににならないかもしれないが、同時代資料としては注意をしておく必要がある。王元軍氏は写経の書き手の身分を省察するための一例として敦煌写経を挙げ、「六世紀初めまでには、敦煌には固定の写経組織があった」とする（王元軍『六朝諸法与文化』二八九頁、上海書画出版社、二〇〇二年）。龍門一四四三窟にも北魏の造像題記だけでも百以上あり、書写集団が存在したのか、しなかったのか興味がある。製作時期や異体字について見ると、例えば、孫秋生造像題記と僧智元乱造像題記には、異体字の共通性も見られ、書き手の相互関連の可能性も否定はできない。魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題編集委員会『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』（汲古書院、一九九七年）所収、「社会と思想」四九九頁三参照。

26 注十四の著書で、宮氏は「孝文帝が開いた龕に造像することや主仏を一仏二菩薩とすることは功利の目的がある。」と指摘する（二六六頁）。この指摘はそれほど強い根拠があるものでもないようであるが、龍門造像題記でも墓誌作製と同種の目的があるという指摘は、墓誌銘と造像題記の共通性を探るためにも注目をしておく必要がある。一方、石刻の字形については、石ならではの理由があるという指摘もある。欧昌俊氏・李海霞氏は、孫秋生造像記の「蕭頭慶書」の「頭」部分に注目し、「画数の多い文字は、書写に不便であり、彫刻も難しいので、部分を省略減少した部分がある。」として四画を省略することにより、書写や彫刻の速度を高めることができた。」としている（『六朝唐五代石刻俗字研究』一〇九頁、巴蜀書社、二〇〇四年）。この指摘は、異体字を考える上で重要な示唆をしている。通常、異

体字の考察では、「A」と「A」という微細な部分を論じるが、その原因まで考えて論述しているものは少数だと思われる。この指摘は、石に刻むということがあるので、画数を省略したのではないかというものであり、一人の書者が、紙に文字を書いた場合、石刻書丹と同じ字体に書くとは限らないという可能性をも含んでいる。また、石刻に限って考えると、例えば二cm角の大きさの文字と五センチ角の文字で字体が異なっている場合、単に異なっていると結論づけるのではなく、その理由が与えられたスペースによるものではないか確認しておく必要もある。

この研究は、基盤研究(C)一般「中国南北朝時代の墓誌銘と造像記の接点―妻子・門弟の文末記録から閨閥を追う―」(課題番号：22520717)の成果の一部である。